

ナボコフの「ロリータ」と谷崎の「痴人の愛」

——対比の試み

ポール・マッカーシー

西原大輔訳

一、ナボコフと谷崎

日本文学、アメリカ文学の双方に関心のある者は、この二人の天才文学者を比較してみたいという誘惑にかられることだろう。どちらもその国の一時代を代表する、一流の小説家である。双方ともに極めて多作であり、数多くのジャンルにわたって、驚くほど多様な作品を生み出した。しかも二人は、性的妄想というテーマを中心に据えたスキャンダル作品の著者として、広く知られている。

ウラジーミル・ナボコフの「ロリータ」は一九五四年に完成し、エロティックな本、いわば猥褻本の出版で知られるパリのオリンピア・プレスから刊行された。不道徳で倒錯した内容だとして、アメリカの主だった出版社に次々と断られた揚句の出版であった(注1)。この近代の古典が英米の主要な出版社から出されるまで、その後数年の歳月を要している。谷崎の作品もまた、しばしば検閲にひっかかった。小には一九一〇年代、今日の読者から見ると全く無害な初期作品「異端者の悲しみ」に對する干渉に始まり(注2)、大には一九三〇年代末、国粹的・軍国主義的内容が欠如しているとして「細雪」に圧力がかけら

れるに至るまで(注3)、しばしばトラブルに見舞われた。しかしナボコフの「ロリータ」問題に最も近いのは、一九五〇年代の「鍵」をめぐる論争であろう。「中央公論」に作品の一部が掲載されるや、ワイセツ作品だとの嫌疑を受けることとなった。作者は草稿の筋の変更・省略を決心し、作品は完成された。当時「中央公論」編集長だった嶋中鵬二氏が言うように、谷崎がもともと構想していた小説がどのようなものであったかは謎である(注4)。

この二人の偉大で息の長い文豪の類似点が際立ったものであるとするならば、一方で違いもまた著しい。谷崎は関西を愛し、関西に長いこと住んだものの、生粋の江戸っ子であった。彼は、根っからの日本人である。自意識過剰で肩肘張ってイデオロギー的に日本人だというのではなく、ごく自然に日本人であった。日本に生まれ育ち、日本で教育を受け、生涯を通じて日本で作家としての仕事をした。戦前、中国へ二度旅行した以外、日本を離れることはなかった。永井荷風はアメリカやフランスで数年間暮らしている。森鷗外もドイツに留学し、不幸な恋愛事件に遭遇した。夏目漱石はイギリス滞在中に不愉快な思いをした結果、発狂寸前にまでなっている。これら著名な日本

人作家とは異なり、谷崎は積極的に欧米の地を踏もうとはしなかった(注5)。彼の西洋に関する知識は、広範な読書体験、及び日本に移植された同時代の様々な西洋文化から得たものである。

中村光夫は初期の谷崎研究で、谷崎の「西洋崇拜」は視野が狭く一面的で、従っていかにも浅薄だと指摘している(注6)。

文学愛好者であり職業作家である谷崎は、十九世紀から二十世紀にかけての西洋の小説によく通じていた。スタンダール、ワイルド、ハーディーの作品を日本語に翻訳し、「春琴抄」の筋立てをハーディーの「グリーンパ家のバーバラ」から採っている(注7)。同様に、ワイルドの「謎のないスフィンクス」が刺激となり、これとは似ても似つかない谷崎独自の「秘密」が生まれている(注8)。従って、谷崎が近代西洋文学を広く深く知っていたことは疑いない。

中村の評論は文学の枠を越え、文化一般を見据えている。谷崎の西洋観は一面的で歪んでいると中村は言っている。谷崎は、西洋の偉大な伝統や精神文化については、近代文学以外ほとんど何も述べていない。西洋の宗教、哲学、政治論、経済理論にはほとんど触れられていないのである。作品に現れたとしても、装飾的なモチーフだったり、故意に歪められたものだったりする。

ナボコフは対照的に、複数の文化の落とし子であった。帝政ロシアに生まれ、母国語ロシア語の他に英仏両語を幼少期に習っている。家族と共に西欧に亡命、ケンブリッジ大に学び、ロシアの知識人作家として戦前のドイツで亡命生活を送る。ファシズムの台頭と共にアメリカに移住、東海岸のさまざまな大

学、主に名門大学で、露語露文学の講師として生計を立てた(注9)。まもなくナボコフは英語で小説を書き始めるが、彼の英語は磨き抜かれた、優雅な、しかし些か特異なものであった。そして、外国語で書くはめに陥ったために失われたものがあると嘆きはするものの、熟達の名作家として世評は高かった。

谷崎と同様、ナボコフは多くの国の文学によく通じている。とはいえ、それらはみなヨーロッパを中心とした伝統を共有している国の文学であった。谷崎ら日本人作家とは異なり、ナボコフは全く異質な文明の文学にどっぷりと浸る必要を感じなかった。この点で、対比は成立しない。イエーツ・パウンド・ウエーリーら一部を除き、西洋人作家は東洋文化に専心する必要はなかったのである。日本の状況は、他の全てのアジアの知識人や文学者と同様、西洋とは異なっている。西洋文化を受容し、変容させ、また反抗することはできたが、無視することは不可能だった。西洋文化が社会に及ぼした影響は図り知れず、知らぬふりは許されなかったのである。

以上の点を考慮すると、ナボコフと谷崎の「多文化主義」を単純に比べることは、それ自体不公平だと認めざるをえない。天稔は西洋側に相当有利に傾いている。ナボコフは幅広いヨーロッパの伝統内で多くの文化に通じているが、少なくとも西洋同様に幅広い東洋文明の流れには無知無関心であろう。天稔は東洋側に不利である。もちろん谷崎は、仏教・儒教・日本固有の文化といった、東洋文明内の多くの要素に関して知識を備えていた。しかし、彼は西洋の伝統という異質なものに直面し、何とかこれを習得せねばならなかった。その上、「近代」とい

うものも加わっている。

中村が近代日本の知識人に求めているのは、西洋文明の源泉を受け入れることであり、科学技術的、物質万能主義的、消費主義的なわかりやすい主張に還元されてしまう、「近代西洋文明」だけを受容することではなかった。それは、ユダヤ教、ギリシャ・ローマ、中世カトリック、宗教改革派プロテスタント、啓蒙主義的ヒューマニズムといった、二、三千年に及ぶありとあらゆる文化的立場を受け入れることであつた。坪内逍遙、夏目漱石、森鷗外、永井荷風といった各々の作家は、それぞれ露・英・独・仏の文化に、様々なやり方で真摯に取り組んだと中村は言いたいのだと思う。しかし谷崎の文章には、比較的真剣な西洋との出会い、西洋の特定の国や文化との出会いを見いだすことはできない。

一方ナボコフは、英米独仏露といった様々な西洋文化の多様な側面に取り組み、作品に描いている。イデオロギー的知的問題に対する彼の意見は未熟だと言う批評家もあるとはいへ(注10)、ともかく近代世界で影響力のあつた思想について、ナボコフは広く考えを述べている。その生い立ちからして、マルクスレーニン主義を軽蔑していたことは想像がつくだろうが、ファシズムや人種差別に対する攻撃もまた激烈をきわめた。政治的には、英米政治の主流たる、一種リベラルな人道主義政策の支持者だつたようだ。宗教は分類してあげつらうものではないが、狂信者や偽善者に悪用されることは認めていた。恐らく最も有名なのは、精神分析など、くだらないエセ科学、創始者フロイトの吹き替えにすぎぬとして、軽蔑を加えていたことだろう。文学の面では、「過大評価」されている「生

半可な」作家たちを攻撃した。ナボコフによれば、彼らは凡庸な性格の持ち主で、写実的描写へと進む傾向を有し、「思想」及び思想の器としての文学なぞに関心を寄せているという。バルザック、ドストエフスキー、トーマス・マンのような連中が、ナボコフのブラック・リストに載っており、印象的だ。このように、中村が谷崎作品に欠けていると指摘した多くの点について、ナボコフはまがりなりにも意見を述べているのである。

しかし、大衆文化に対する興味関心という点では、二人の文豪は共通点をもっている。谷崎は歌舞伎や老舗の豆腐や刺身のような、伝統的江戸町人文化の名残を喜んだ。また舶来の洒落たモダンな西洋文化にも目がなかつた。スパッツや山高帽、「本物のウスターソース」をかけたロースト・ビーフ、アブサン、シャンペン、コニャック、そして何よりも活動写真(注11)。谷崎は初期の映画を楽しんでばかりか、現代大衆芸術の様式として、その可能性にたちどころに目をつけた。一九二〇年代、彼は日本映画の脚本を数多く手がけており、現在映画研究者らは、谷崎の全仕事の中のこの知られざる一面に大きな関心を寄せ、絶賛している(注12)。要するに、谷崎は少なくとも中期まで、当時の大衆文化に凝っていたのだ。スノビズムなどもなく、自分自身の趣味に自信満々だったため、谷崎は純粹な情熱をもつてこの「大衆文化」に進むことができた。ただ単に斜に構えていたのではなかつたのである。これが、彼の有名な半喜劇的小説「痴人の愛」の背景となっているのであるが、これについては後ほど詳しく検討したい。

ナボコフもまた、「ロリータ」でアメリカの大衆文化をふん

だんに利用している。語り手の主人公はヨーロッパの知識人で、学者の端くれとして生計を立てている亡命者であった。主人公がヒロインとかかわりあい、オデュッセウスもどきのアメリカ遍歴をすることで、観光地やその風景、モーター、ファースト・フード店、教育機関といった、高低さまざまな部分に光があたることになる。主人公ハンバート・ハンバートは、作者ナボコフ自身と同様、五十年代のアメリカのスペクタクルにひきつけられ、胸躍らせ、そして眉を顰めたのではあるまいか。もちろん、「痴人の愛」の讓治の場合に比べ、ハンバートは自分を取りまく文化環境に対して距離を置き（一方は亡命知識人・学者であり、もう一方は母国に住むホワイト・カラーだ）、皮肉、さらにはパロディーの余地をも残している。

谷崎の感性が本質的にブルジュアの（江戸・東京下町人の）ものであるとするなら、ナボコフの感性は貴族の、彼が生まれついた富裕な貴族階級のそれであった。文体という点から言えば、ヨーロッパ仕込みの、ペダンティックでわざとらしいほど上品なハンバートの言葉、上流文化の後を追おうとする中産階級のシャロット・ヘイズの口調、娘ロリータの、下品だが生き生きとした素朴な俗語、これらが交錯する点が、小説の魅力の一つになっている。

二、「ロリータ」と「痴人の愛」

取り上げた二篇の小説のあらましを書き連ねる余裕はないが、構想・構造を検討し、類似点と相違点を明らかにすることも大切だろう。「痴人の愛」で、中産階級の技師河合讓治は、カフェに奉公する少女を見かけ、女がほぼ自分の理想的な「タ

イプ」だと気づき、関係を結んで同棲し始める。二人の関係は時間と共に変化した。出会った時ナオミはわずか十五歳で「ウایتレスの卵に過ぎなかつた」（三三頁）。一方讓治は一人前の二十八歳で、「最初の私の計画は、兎に角此の児を引き取つて世話をしてやらう（中略）此れは一面から云ふと、彼女に同情した結果」（六頁）だと述べている。従つて、男は直接的な動機から行動したのではなかつた。しかし彼は将来の事も考えていた。少女に同情を寄せるや、男は「ナオミのやうな少女を家に引き取つて、徐にその成長を見届けてから、気に入つたらば妻に貰ふと云ふ方法が一番いゝ」（八頁）と述べる。しかしその間「私とナオミでたわいのないままごとをする」（八頁）という。そして当初、二人は本当に言葉通り、鬼ごっこや目隠しやお馬さんごっこをして「遊ぶ」のである。海辺に滞在中、新しい親密な遊びが始まつた。讓治は定期的にナオミをお湯へ入れてやる。そして一年ほどたち、少女が十六の春を迎えた時、二人の関係は性的なものになるのである。それまでにお互い了解ができており、籍は入れたものの、世間には知らせなかつた。

この夫婦は妙な取り合せて、年齢も出自も教育も異なっていたが、少なくとも形式面では、二人の関係に何の法的道德的問題もなかつた。その上、最後には結婚しようとする少女を育てるといふ部分は、西洋人読者にとってはかなり衝撃的だが、日本人読者にとっては、「源氏物語」以来親しんできたモチーフである。光源氏は若紫に対し、これと全く同じことを行っている。讓治とナオミの世界は源氏と若紫の世界とは遙かに隔たっており、古典との類似は、パロディーとしての側面も

あるに違いない。しかし、このような男女関係自体は古典に先例があり、決して下等なものではなかったのである(注13)。

ナボコフのハンバート・ハンバートはロリータとの関係において似たような道をたどっているが、やましさをキャンダルの性は、終始一貫して強いものだった。ハンバートが理想的少女と出会ったのは、ニュー・イングランドの大学町の中産階級の家であり、男が密かに女給を漁りに行くような「カフエ」ではなかった。女は十五歳どころか、僅か十二歳である。しかもハンバートは最初から、艶情や性的関心から少女を眺めていた。ロリータは、初恋の相手アナベル・リーの生まれ変わりであり、男が全人生をかけて求め続けてきた「タイプ」であった。男が初めて彼女を目にしたその時から、きわどいエロティシズムが描写に現れる。ハンバートの胸中のエロティックな想像が、スキヤングラスで楽しい「遊び」のほむらと燃え盛るのは、それからほんの数日後のことであった。

ハンバートを愛するロリータの母が、娘を邪魔にならぬようサマー・キャンプにやっつけてしまうと、この放蕩は進展を妨げられてしまう。ハンバートは娘に近づくためにその母親と結婚するが、悲劇とも喜劇ともつかぬ事件が起こり、母親の方は舞台から消える。今やハンバートは養父の位置にあった。義理の娘と長旅に出るや、二人は関係を結ぶ。男は制定法上の強姦を働いたばかりか(ロリータは合意の上で性交を行うには幼すぎた)、半近親相姦をも犯したのである。法的道徳的な罪の意識が全巻に鋭く影を投げかけ、なまめいた熱情、パロディー喜劇双方の場面を、複雑で陰影あるものにしていく。結果ナボコフの小説は、谷崎作品に比べ随分色調が暗く、不安定な曖昧さに

満ちることとなった。

二人のヒロインもまた、似通った面はあるものの、より重要な点で異なっている。双方とも単純で育ちの悪い女として描かれているが、年上の恋人を騙す段になると、悪知恵や二面性を遺憾なく発揮する。物語の前半で、讓治はナオミを頻りと動物になぞらえる。ナオミは「小鳥」(七頁)、「賢い犬」(十頁)、「野生の獣」(一一七頁)、「悍馬」(一二七頁)だとされる。後に、十九歳の彼女が讓治を裏切り、何人かの別な男と関係していたことが発覚した時、彼はナオミを「卑しむべき娼婦」(二一〇頁)と思うのであった。最後に彼がナオミを捨てようと思いに決めた時には、「邪悪の化身のやうな姿」(二一八頁)と述べられる。讓治はナオミを殴りつけ、「犬！人非人！」(二一九頁)と罵倒し、家から追い出したのであった。

しかし一、二時間もすると、彼の気持ちは急に変わり始めた。「だん／＼その憎らしさが底の知れない美しさに変つて行くのでした(中略)」「彼女の顔は」「邪悪の化身」であつて、そして同時に、彼女の体と魂とが持つ悉くの美が、最高潮の形に於いて発揚された姿なのです」(二二三頁)。ここには、批評家の言う谷崎の「悪魔趣味」が現れている。悪であればあるほど美しい。非難したり軽蔑したりするどころか、その前に跪拝する。この自虐性自体、いわば谷崎的マゾヒズム、フェティシズムの具体的表現である。「私は彼女が恋しさの余り(中略)二階へ行つて、彼女の古着を引つ張り出してそれを何枚も背中に載せ、彼女の足袋を両手に嵌めて、又その部屋を四ツン這ひになつて歩きました」(二二三—二四頁)。この文字どおりの偶像崇拜の流れを受けて、讓治は家を出て行つてしまったナオミ

を「希臘の彫刻か奈良の仏像（中略）芸術品」（二二五頁）になぞらえ、「それをしみ／＼眺めてみると、宗教的な感激さへが湧いて来る」（二二五頁）という。

その後あれこれあつて、ナオミと讓治は再び一緒に暮らし始める。今度はナオミのやりたい放題であつた。小説の最後の部分で、冒頭から存在していたもう一つの描写のモチーフが、新たに強調される。外国的な白い女神としてのナオミである。冒頭でナオミは、カナダ人映画女優メリー・ピクフォードに似ており、混血児のようだとされてきた。今や彼女は「大理石のヴィナスの像」（二八一頁）と描かれる。ナオミの「真つ白に牙え」（二八七頁）た肌は剃毛されているが、それは「西洋」や「亞米利加之女」（二八八頁）を見習つた新しい習慣であつた。その上ナオミは新たな関係の下で、「これから成るべく西洋人と付き合ふの、日本人より面白いわ」（二九六頁）と宣言する。気の毒に讓治は服従するほかなかつた。

もちろんナオミは、有閑マダムとして、望みの生活を手にした。「体ぢゆうへお白粉を塗り」（三〇一頁）、マツカネルとかデュガンとかユスタスといった名前の新しい友達と出かけるのであつた。「夜会の席で婦人や紳士に愛嬌を振りまきながら、彼女がべら／＼まくし立てるのを聞いてみると、何しろ発音は昔から巧かつたのですから、変に西洋人臭くつて、私には聞きとれないことがよくあります。さうして彼女は、とき／＼私を西洋流に「ジョージ」と呼びます」（三〇二頁）。末尾には「此れを読んで、馬鹿々々しいと思ふ人は笑つて下さい。教訓になると思ふ人は、いゝ見せしめにして下さい」（三〇二頁）とある。三十六歳の讓治は、相変わらず二十三歳のナオミに惚れて

いた。谷崎の意味で、これは確かに一種のハッピー・エンドだろう。

ハンバートのロリータに対する情熱は、讓治のナオミに対する情熱よりも強かつた。ハイカラな活動女優の「タイプ」にそっくりだというような、つかみ所のない理由に発したものでなかつたからだ。十三歳の時に出会い、愛しい、そして別れた同い年の初恋の相手、その人に似ていた（ように思われた）せいなのである。その人の名はアナベル・リー、ポーの有名な詩「アナベル・リー」にちなんだものである。この詩は幼き恋を歌い上げたもので、愛は少女の死で結末を迎えるが、男の方は病的なほどの情熱をもち続ける。詩はポー自身の、十三歳のいとこに対する熱愛と結婚の体験を反映したものであり、人生と芸術が完全に照らしあつている。ハンバートは更なるアナベル・リーを求め続け、青春そして中年期の長い歳月を過ごしたのであつた。この純粋で若々しいはずの情熱は、幾多の春秋を経て、露骨で邪悪な破壊的妄執となる。

このように、ハイカラなメリー・ピクフォードに対して、永遠の少女アナベルがあり、動物愛玩の暗喩に対して、「ニンフェット」への盲目的礼讃がある。無論「ニンフェット」とは幼い妖精のことで、古代ギリシャの森や川に住む美しく神秘的な女神であるが、ハンバートはその古典文学上の先例として、ヴァージルの詩やダンテのベアトリーチェやペトラルカのラウラを挙げている（二九頁）。一方ロリータはまさしく現代の（五十年代アメリカの）少女であり、生き生きとした俗っぽい言葉遣いや、だらしない程カジュアルな服装、あけすけで気まぐれな様子が、こと細かに描かれている。これら全てを通じて「永

遠の女性」、いや寧ろ「永遠の少女」の片鱗がうかがえる。イヴはハンバート博士の姿をしたアダムを誘惑しているのである。ロリータと首尾よく寝ることができた時、(彼自身が少女に薬を飲ませ、周到な準備の上でベッドにもぐりこんだにもかかわらず)自分をそのかしたのは女の方だと主張する。

もちろん、ハンバートの言うことは眉唾である。ロリータを男たらしにしようとしたのは、彼の方であった。ハンバートのポーズは、この本を、感受性が鋭く基本的な上品、むしろ意志の弱い恋の犠牲者のものだと思せようとするところから生じている。「私が獣欲に狂った悪鬼ではないことを、そんなものであるはずがないことを、どうでも証明したかった」「私がにじり動いたあのおだやかな夢の地帯は、詩人の固有領域で、犯罪者の徘徊する場所ではなかった」(二〇〇頁)と、彼は疑念を払おうとする。これはまさに、並外れた弁解だ。ハンバートは抜け目のない語り手であり、信用がならない。しかしロリータの方も、処女でなかった可能性がある。彼女はアメリカの早熟な子供であり、十二歳半で既に処女を失っていた。その相手は「小さなレズビアン」だとハンバートは考えたが、あるいは彼が恐れ憎んでいた少年たちの一人だったかも知れない。「髪をきれいに刈って、てかてかに光らし、派手なシャツと上着を着た、すきのない目つき、青白い顔のチンピラども」(二三八頁)、「体のひよる長い淋病でもわずらっているような金髪の醜男の高校生」(二三九頁)と、ハンバートは毒づいている。

ハンバートが恋敵を恐れるのはもつともだが、本当の敵は物語に早くからちらちらと姿を見せる劇作家であった。二回目の大陸横断旅行で、ロリータはハンバートのもとから逃げ出し、クレア・キルティと駆け落ちする。ハンバートは絶望し、三

年間二人を探し続けた。ロリータを見つけ出した時には、彼女は容色衰え、労働者の妻におさまっており、貧しく、身ごもっていた。この感動的な場面で、ハンバートは初めて、性欲ではなく愛情を感じ、ロリータの幼少期を踏みこじってしまったという後悔と呵責の念にかられる。そして小説のクライマックスは、ブラック・ユーモアの利いたグロテスクな殺人場面である。ハンバートはなぶるように恋敵を処刑し、「キルティ」という声をごだました(彼は「ギルティ」と言葉遊びにふけていた)。この小説は、殺人事件の裁判を待つ間に書かれた告白であり「アポロギア」であるとされている。実際には裁判が行われる前にハンバートは死に、またロリータも出産で亡くなってしまふ。二人(キルティを含めれば三人)の命が失われており、決してハッピー・エンドとは言えない。しかし恐らく、ハンバートの改心による救済が暗示されているのである。そして、面白く、機知に富み、邪悪で美しいテクストが残った。芸術によって永遠のものとなったニンフェット、ロリータと共に。

最後に、二人のヒロインの名前を見てみたい。二人のヒロインの名は、両小説の英語のタイトルとなっている。谷崎の小説で、最初に譲治は正しくナオミの名前にひかれたのであった。「奈緒美」は素敵だ、NAOMIと書くともまるで西洋人のやうだ(四頁)。ナオミという名前は、譲治の「西洋」崇拜を象徴しているのである。もつとも、ここで言う「西洋」とは、大正時代の日本の大衆文化の中の「西洋」でしかなかった。谷崎はナオミという名前、ナオミという少女の形を使って、再構築された「西洋」の魅力と欠点の両方を表現したのである。ある意味で、ナオミという名前はこの小説の大きな主題——専ら空想

上の、大衆文化の中のモダンな「西洋」——を如実に示している。一方日本の批評家は、ナオミという名のもつ意味に注目している。ある批評家は「痴人の愛」のナオミと漱石の「草枕」の那美の対比を行い、「痴人の愛」は漱石的文学に対する一種の批評になっていると指摘している(注14)。

ナボコフの小説の場合、名前が中心に据えられていることは、極めて明白である。それは谷崎の場合のような、主題としての中心などではなく、連想をもった響きそのものである。

「ロリータ」は作品名であり、小説の冒頭の言葉であり、最後の言葉でもあった。有名な冒頭の段落で、ナボコフ(及びハンバート)は“*Lolita, light of my life, fire of my loins*”と、頭韻を踏んで楽しんでゐる。第二文では、ロリータと発音する時の舌の動きも描きつつ、より多くの頭韻を使っている。“*the tip of the tongue taking a trip of three steps down the palate to tap, at three, on the teeth. Lo. Lee. Ta.*”

恋人の名前の響きについてあれこれ述べた後、語り手は、短いあだ名、長いあだ名、本名、自分が好きな呼び方など、ロリータの名前をあれこれ考え、その一つ一つに彼の「ニンフェット」の様子を結びつけた。「朝、ソックスを片方だけはきかけて立つ四フィート十インチの彼女はロダ。ただのロダ。ストラックスをはくとローラだ。学校ではドリーだ。正式にはドロレス。しかし、私の腕に抱かれるときの彼女は、いつもロリータだ。」(一四頁)。作品を通じ、主人公はムードや状況にあわせて、呼び方をいろいろに使い分けている。カリフォルニアを旅行中、彼はミッシェン・ドロレス(ドロレス伝道所)を訪れている。この教会は実際には、スペイン・カトリックの伝統たる悲しみの聖母に捧げられたものである。当意即妙というか罰当

たりというべきか、「ミッシェン・ドロレス」はこの本の題名にもつてこいだと彼は述べる。主人公の最後の五年間は、唯一の使命たるドロレスつまりロリータに身を捧げていたのである。しかし結局それは、「ミッシェン・インポスイブル」となつてしまった。「私がおまえと永遠の生を共にすることができるとすれば、ただひとつ、これ「芸術という避難場所」しかないのだ」「ロリータよ」(四六七頁)。小説の結末は冒頭部分と同様、「ロリータ」というなまめかしい三音符で終わるのである。

* 作品からの引用ページは、『谷崎潤一郎全集』第十巻(中央公論社、一九八二)及びナボコフ著・大久保康雄訳「ロリータ」(新潮文庫、一九八〇)による。

注1 「ロリータ」の成立及び複雑な出版経緯に関しては、ナボコフ「ロリータ」について」(新潮文庫版、四六八―四七七頁)参照。

注2 ケン・K・イトー「異端者の悲しみ」の「はしがき」。「谷崎潤一郎国際シンポジウム」(中央公論社、一九九七)所収。

注3 アンソニー・H・チェンバース「春のなごりに―政治小説としての『細雪』」。前掲「谷崎潤一郎国際シンポジウム」所収。

注4 嶋中鵬二「鍵」とワイセツについて」。前掲「谷崎潤一郎国際シンポジウム」所収。

注5 谷崎の生涯については、野村尚吾「伝記谷崎潤一郎」(六興出版、一九七四)参照。

注6 中村光夫「谷崎潤一郎論」(河出書房、一九五二)―五一頁。

注7 Ken K. Ito, *Visions of Desire: Tanizaki's Fictional Worlds* (Stanford University Press, 1991), pp. 168-70.

注8 ワイルトと谷崎作品との関係について Paul F. McCarthy, "Tanizaki's Literary Exoticism: A Case of Probable Western Influence" 一一九―一二三頁参照。『英米文学』第四十四号(立教大学、一九八四)所収。

注9 ナボコフの生涯については Brian Boyd, *Vladimir Nabokov: the Russian Years* (Chatto & Windus, 1990) 24-5; *Vladimir Nabokov: the American Years* (Chatto & Windus, 1991) の二冊を参照。

注10 例えば Michael Wood, *The Magician's Doubts: Nabokov and the Risks of Fiction* (Pimlico, 1994), p. 22, 210ff. et passim.

注11 幼少期および若年期に谷崎が触れた国内外の大衆文化については「谷崎「幼少時代」参照。英訳は *Childhood Years, a Memoir* (trans. Paul McCarthy; Kodansha International, 1988)。

注12 ショアン・R・バーナーティ「文学的連環―谷崎潤一郎と「純映画劇」運動」。前掲「谷崎潤一郎国際シンポジウム」所収。

注13 「痴人の愛」と「源氏物語」の類似性については、秦恒平「谷崎潤一郎」(筑摩書房、一九八九)参照。

注14 浅野洋「反・山の手の物語―「痴人の愛」の戦略」。『昭和文学論考―マチとムラと』(八木書店、一九九〇)所収。初期の評論に現れている見解をまとめた上で、漱石及びその作品に対する谷崎の批判的立場について、新たな見方を提示している。有益な論文である。

—Paul McCarthy 駿河台大学教授・比較文学—